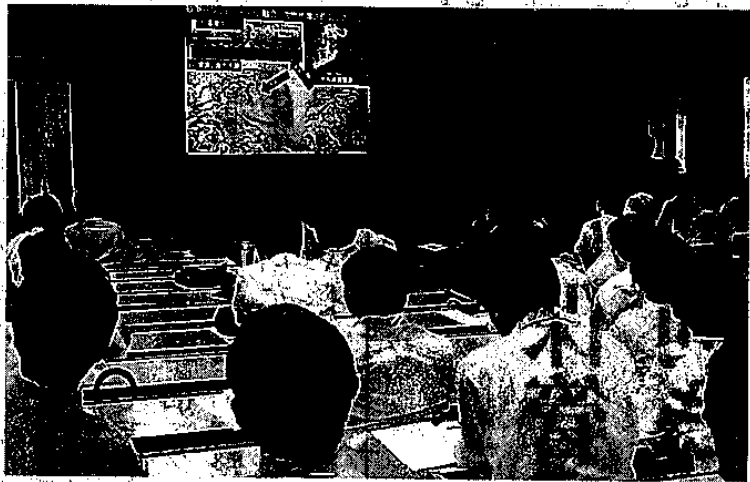


4連動型地震を討論

松山で土木学会全国大会

高知で津波20センチ予測も



次世代スーパーコンピューターによる災害シミュレーションなどの発表があった土木学会の研究討論会＝7日、愛媛大

2011年度土木学会全国大会が7日、松山市文京町の愛媛大を主会場に始まった。東日本大震災を受け「今一度、土木の原点に誇れる日本、住みよいまちへ」をテーマに、

国内外の研究者が、26の研究討論会や3200の学術講演に参加。災害に強い都市づくりや構造物の地震対策、防災意識向上について議論を深める。

初日の次世代スーパーコンピューターを利用した地震・津波・構造物の被害シミュレーションを題材にした研究討論会では、東京大総合防災情報研究センターの古村孝志教授

が、東日本大震災で巨大津波が起きたのは、複数の震源域が連動しただけでなく、海溝に近い海域の地殻変動による「津波地震」が原因とみられると説明。西日本に置き換えると東海・東南海・南海の3地震が連動し2万人以上が死亡したとされる宝永地震（1707年）と、海溝に近い場所で起きた「津波地震」とみられる慶長地震（1605年）が同時に起きた場合が該当するとした。

現在、3地震が連動した場合の高知周辺の津波の高さは12センチを想定しているが、「津波地震」を加えた4連動型では暫定計算でも20

センチ近くになるなど1・5～2倍に達すると分析。高知県で約2000年前の地層に宝永地震の規模を大幅に上回る津波堆積物が見つかったことを紹介し、4連動型地震が実際に起きた可能性も示唆した。

8日は午後1時半から、同市堀之内の市民会館でシンポジウムがあり、河田恵昭・中央防災会議専門調査会座長や尾崎正直高知県知事らが「巨大津波とどう向き合つか」をテーマに、東海・東南海・南海地震対策などについて議論する。入場無料。

（森田康裕）

（10面に関連記事）